

平成二十五年十月

越中 哲也

## 長崎くんち今年のみどり(その二十六)

一、はじめに

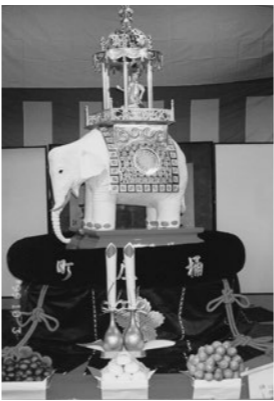
今回は昭和二十年の終戦前後の「おくんち」の模様をたずねてみる事にした。昭和十一年日支事変前後の「おくんち」は十月七日のお神輿の渡御のみであり奉納踊はなかった。続いて十二年・十三年も奉納踊はなかった。ところが昭和十六年には愛国心の高揚の為というので、十月七日古式により丸山町の傘鉾・本踊奉納を中心にして興善町の傘鉾、本籠町蛇ばやし、今博多町、上筑後町、江戸町の三ヶ町はシャギリの奉納。次いで昭和十七年にも前年同様、戦意高揚というので十月七日傘鉾・本踊・川船等の奉納、神輿の渡御もおこなわれた。

然し、翌十八年、十九年には第二次大戦勃発という事で、さすがに神社祭礼は別として奉納踊・神輿の渡御も中止されている。

昭和二十年八月九日原爆投下、十五日終戦であった。当時の長崎市長は昭和十六年以来岡田寿一氏であった。そして九月二十三日には二五、〇〇〇人のアメリカ軍が出島岸壁より上陸、軍司令部が出島におかれ、町中には多くのアメリカの兵隊さんがいた。「この状態では、おくんちは到底ありませんよ」と町の人は思っていた。

ところが、突然・十月七日月朝九時頃、お諏訪様の長坂より「モッテコイ」「所望ヤレ」の歓声がわきあがり、長坂は鈴なりの人ざかりだったのに驚いた。この「長崎くんち」の強行推進役は丸山花月の本田寅之助老でした。神輿のお下り、お上りはありませんでした。

後日、本田老にお逢いした時、「長崎のオクンチは、せんば、いかんよね」と言われた事を、今、思い出している。



桶屋町傘鉾

翌、昭和二十一年も十月九日の一日のみ奉納踊があり、御神輿の行列もお旅所がまだ無かったので朝十一時頃出

発・浜町・かじや町を廻り午後四時頃、お上りがあった。昭和二十二年の「おくんち」は十月八日の一日で前年同様であった。

昭和二十三年の「おくんち」は昔どおり復活し、七日は朝より寄合町を始め奉納踊があり神輿のお下り、九日はお上りがあった。但し、お旅所は大波止でなく浜町の浜屋裏の空地に造られた。市長さんは大橋博氏で長崎市では、之の「おくんち」に併せて三日間を「長崎市民祭」と称し戦後の不況解消行事の一つに取りあげ大盛況であった。

昭和二十七年の十月、「おくんち」のお旅所が旧大波止に近く江戸町公園内に造られ、昔どおりの県庁坂のお下り、お上りが見られるようになった。

昭和三十四年三月田川務市長の時、長崎商工会議所会頭中部悦良氏を中心に「長崎くんち振興会」が結成され、「長崎くんち」を長崎観光事業と長崎文化復興の一大基点として取り上げる事に決定、長崎くんち年番町・踊町の代表役員、前述の本田寅之助氏と同氏を大いに援助されていた山下誠氏、学術関係者として林源吉、渡辺庫輔、永島正二、丹羽漢吉等の各氏が集まり、そして、ちょうど此の時、戦後の全市町名変更の事があり、旧町が廃止され隣町と合併し、新町名となった処も多くあったので「振興会」では、江戸時代に編成された年番町・踊町の全てを改編、現在のような「長崎くんち奉納踊番付」となり、昭和五十四年二月三日付にて「長崎くんち」は「国重要無形民俗文化財」に指定された。

また、昭和二十三年には前述のように戦後の「長崎くんち」が復興されて以来、「おくんち」並びに各町奉納踊の案内解説書として山下誠氏は呂紅(社)を結成「長崎くんち」を発刊、現在も尚、之の「長崎くんち」は御子息の寛一氏に引き続かれ今年(平成二十五年)も発刊されている。

### 二、今年度の奉納踊のこと

○桶屋町 桶屋町象時計の傘鉾は、其の垂れ幕の模様上部の時計に因

んだ十二支の長崎刺繍が施され昔より有名で、市文化財に指定されている。製作年代は時計に戊辰(安永元一七七二)の記載があり、当時つくられたものである。傘鉾は踊場に入ると時計の針が回り、象の鼻が動き上のオランダ人が時の鐘を打つ。踊は藤間金彌社中の人々と町内の子供連中が奉納する。

○船大工町 その昔、「銅座」が筑かれるまでは此の町のすぐ裏は浜町に続く海岸で、長崎に入港してくる貿易船の多くは其の海岸に船を繋いでいたので此のあたりには多くの船大工さんがいた。其れが町名になったという。傘鉾は其の船の完成を祝して棟上の屋上飾りに木槌・陰陽二本の鐺矢を配し、紅白の縮緬であやかにくくるといふ、実に洒落た趣向の傘鉾として評判のものである。奉納踊は町名に因んで川船であり、其の船頭さんの衣裳は昔より長崎刺繍として評判の物である。

○丸山町 丸山・寄合の両町は「長崎くんち」に寛永の昔より最初に奉納踊を奉仕した由緒ある町であり、両町の傘鉾とくに丸山町の傘鉾には古式の俵が良く残っており、長崎を代表する傘鉾として全国的にも良く知られている。奉納踊も嘗ての華街の面影を偲ばせて長崎芸能会の人々を中心に優美に粋に手古舞が奉納されるとおききしている。

○本石灰町 この町も昔は海岸に近く、御朱印船によって多く輸入されていた。石灰は小船に積みかえられ、此の町の前を流れる小川の川岸で荷上げされていた事が町名の由来となっている。次に御朱印船といえば、御朱印船の船主荒木宗太郎は安南国で大変な信任をうけ、国王の一族アニオさんをお嫁にいただいて帰国している。この町の奉納踊は之の説話に因んでいるし、現在の傘鉾かざりも之の説話に係りしている物ですと、お聞きした事がある。

○榮町 現在のこの町は戦前の袋町を中心に旧酒屋町が合併し現在は新町名で踊町に参加されている。傘鉾は旧酒屋町の物を使用している。同傘鉾は、秋の紅葉の下に貝合せの蛤四枚、その蛤には幽雅な源氏物語絵巻が描かれ、下の根縮には熊笹が配してあり幽雅である。奉納踊は長崎花柳流に伝承されてきた「オランダ万才」が町内の子供連中も加え賑やかに奉納される。

○万屋町 長崎古図をみると之の町の旧名は「本かじや町」とある。其の後、中島川を中心に新しい長崎の町が発展した時、この町は万屋町となつていく。よろず商品が販売された事に因んでいる。其の後、町

は川ぞいにあつたので魚問屋の街となり「魚おおいに販売」とある。その頃の鯨は呼子方面より多く持ち来り、この町の奉納踊り鯨囃子はその呼子屋の指導によると「長崎市史風俗編」に古賀十二郎先生は記しておられる。また本町の傘鉾の幕に図案してある「長崎刺繍魚尽し」も有名で、其の詳しい説明は『奈雅瑳奇・創刊号』に福井潔氏が記されている。「万屋町傘鉾魚づくし刺繍の垂れ」を読まれるとよい。

### 風信

○九月の行事は、三日、長崎市出身で近代活版印刷の創始者・本木昌造翁追悼法要が恒例により大光寺墓前で開催。

○其の夜は、之も恒例の華僑三山公帮より崇福寺普度蘭盆勝会(中国盆)の招待あり。(両行事に参加)

○四・五日は福岡の筑紫女学園大学より、始めて研究学習としての「長崎の文化史」を取りあげるので協力して下さいと旧知の宇治和貴先生より連絡あり、当会の内川雅史氏と共に参加。

○六日、午後より全国的に大いに評判になっている長崎商工会議所主催・長崎歴史文化観光員検定試験第八回を来年一月二十七日実施するので、其の問題作成委員会に出席依頼。(出席)

○七日は長崎県九条の会事務局長井田教授より、午後二時半より県内委員会を開催するので出席するようにとの事。(出席)

○今月より八月中は夏休みで休講していた毎週月曜朝十時半より開催の長崎学講座。同毎週水曜日一時半よりの水曜懇話会。(竹之下・江口・田村他各氏主導)。毎月第一、第三火曜日午前十時半より古文書勉強会(宮田・川原氏指導)。第二、第四金曜午後一時半より長崎食文化サークル(脇山壽子・太田氏他を中心に)本会は全て自由参加・会費不要(但し資料代は各自)

○今月・御寄贈いただいた書籍

- 一、新名規明氏より、自著の『鵬外・歴史文学序論』著者の鵬外文学に対する歴史観が展開され好著。(梓書院刊・二、五〇〇円)
  - 一、長崎経済研究所より『ながさき経済8』(長崎経済研究所発行)
  - 一、『民具マンスリー』(13・五・六・七・八)『(神奈川大学常民文化研刊)』
  - 一、九州歴史資料館より、『研究論集38』九州古墳研究
  - 一、九州歴史資料館より、『研究論集38』九州古墳研究
- 究を中心に松浦氏旧蔵古鐘・筑紫高校所蔵瓦の紹介(平成25・3刊)

